

## 野・原・山と考古学 — 豊川流域の遺跡分布から —

鈴木 忠 司\*<sup>1</sup>

### 1. 遺跡分布の実情

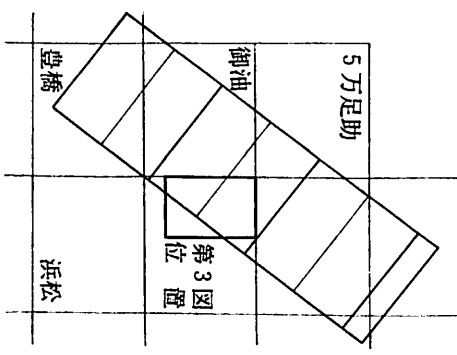
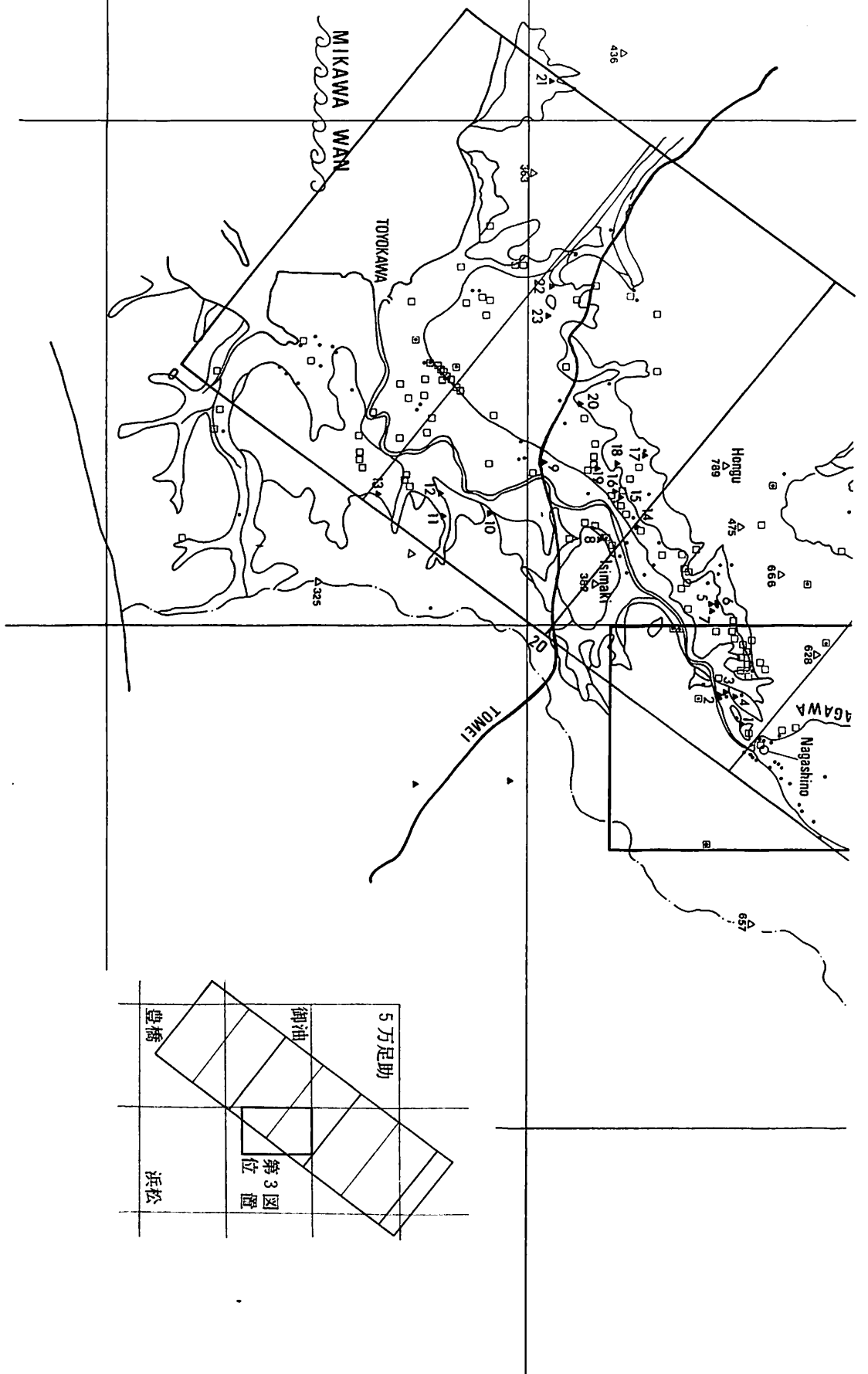
豊川を河口から遡って、長野県境に聳える愛知県最高峰・茶臼山（標高1,415m）までの60kmあまりの間の分布を見てみると、いくつかの興味深い事実が浮かび上がってくる。まずこのあたりの実情を見ながら、これに関連する話題に触れていくことにしよう。豊川は中央構造線の断層谷を流れる。西方には本宮山を南の頂点とする山地が連なり、東には静岡県と境する600m前後の山塊が連なる。なお本宮山塊の西側は矢作川流域まで徐々に高度を下げながらいわゆる三河高原の平坦面を形成する。両山地の間には河口から30km長篠付近を扇の要として、ひろく平野が展開し、扇状地性の台地や段丘地形（以下、段丘地形と略称）が発達している。豊川は長篠から左すれば寒狭川、右すれば三輪川となる。寒狭川を遡りはじめると一帯は山地となるが、しばらくはまだ端山の趣がある。寒狭川の上流域田口付近に至ると周囲には1,000mをこす峰々が姿を現し始め、山は一層深さを増して茶臼山へと続いていく。

このように豊川を遡って茶臼山に至る間の遺跡分布を示したのが第1図である。これを豊川を中心軸として幅20km、南北64kmの区画を設けてこのなかで遺跡の分布を詳しくみてみよう。この方形区画内に含まれる遺跡数は合計461ヶ所である（第1表）。時代別に見ると、岩宿時代25（第1図1~25）、縄文時代304、弥生時代132ヶ所の内訳となる<sup>1)</sup>。はじめに全体の分布傾向を概観すると、長篠から下流の平野部と田口・津具方面の2ヶ所に密集部を形成していることに気づく。前者は弥生時代、後者は縄文時代の遺跡の存在が顕著である。このような遺跡分布を時代別に見るとどのようなようになるだろうか。この点をもう少し詳しく見ていこう。河口ラインからの距離によって10kmごとの集計を意識しながらまず見てみよう。

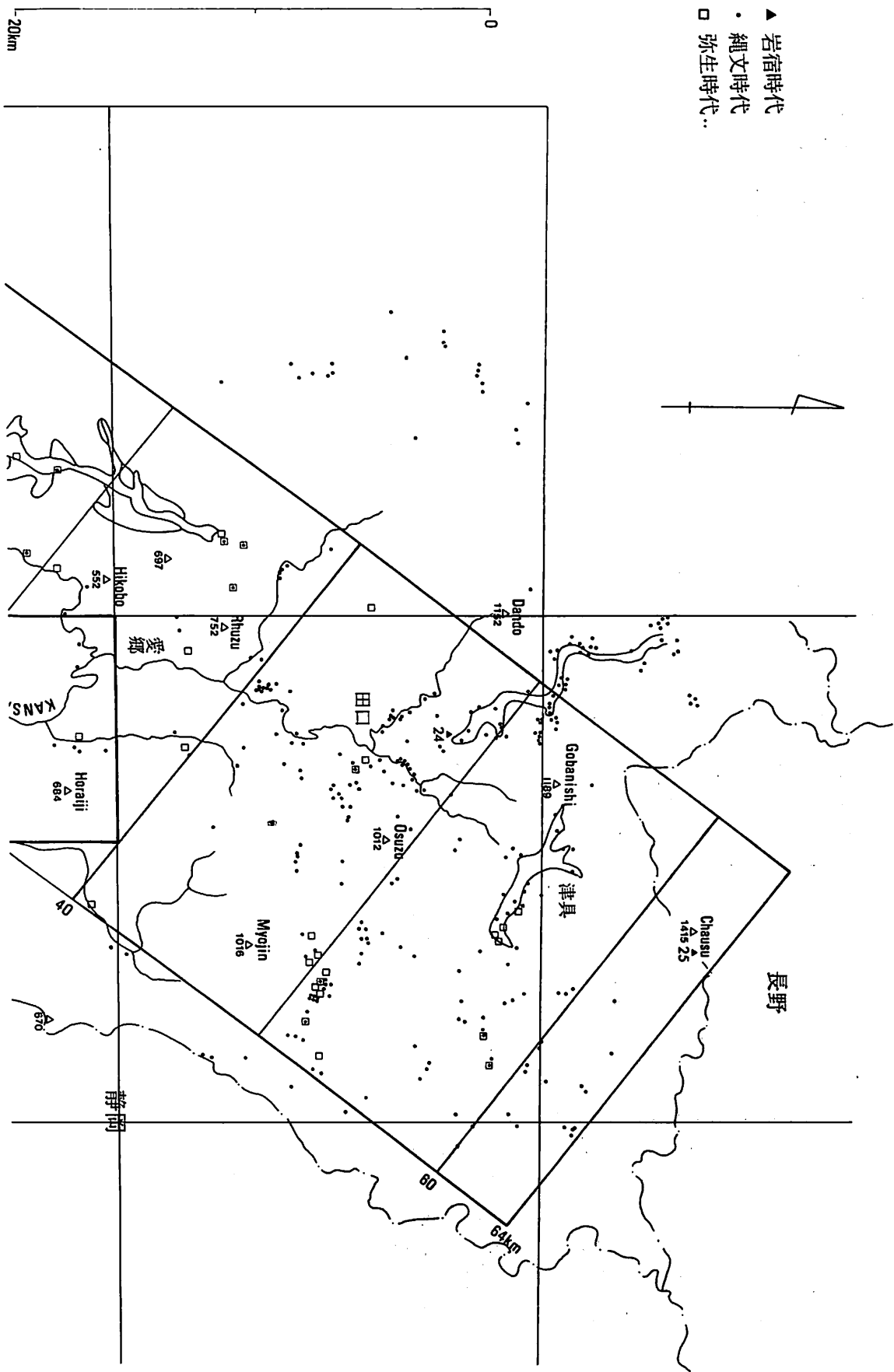
岩宿時代の場合、10キロ圏内の遺跡数は1遺跡に過ぎず、20キロ圏に一番多く15遺跡（60%）が集中する。30キロ圏すなわち平野部が終わる地点までの河川沿いの段丘上まででほとんど遺跡の分布がとだえる。あとの30余キロの間には2遺跡を数えるにすぎない。茶臼山の山頂付近の高原に1ヶ所（第1図25）だけぽつんと遺跡が位置している点が印象的である<sup>2)</sup>。

なお岩宿時代の遺跡分布については以下の点に留意しておく必要がある。当時の海面は現在よりも100~50m低く、したがって、当時の豊川は伊良湖岬で古木曾川

\* 1 京都文化博物館 〒604 京都市中京区三条高原



- ▲ 岩宿時代
- 縄文時代
- 弥生時代



と合し、伊良湖岬の沖合約35kmの遠州灘に注いでいたことである。現河口は当時の中流域に相当する。したがって、豊川流域に広がる現沖積面下には、多くの遺跡が埋もれている可能性が高い。

縄文時代では、遺跡の分布しない方格はない。全体傾向として上流に行くにしたがってその比率を高め、60キロ圏で最大値を示すことが大きな特徴となっている。長篠を基点とする上流の山地部と平野部に2分してみると、上流の40～60キロ圏に全体の約80%が集中する。この関係は岩宿時代とまったく逆の関係を示しているといつてよい。

第1表 距離圏・時代別遺跡数集計表

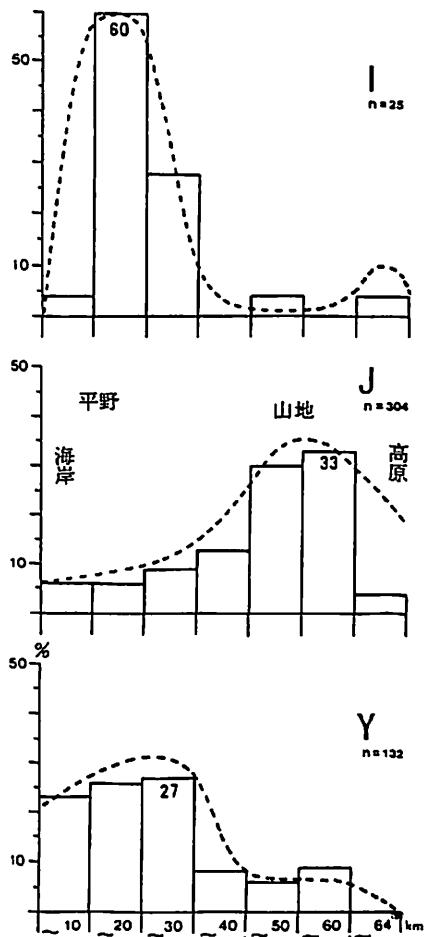
		～10	～20	～30	～40	～50	～60	～64km	合計
岩宿	実数	1	15	7	—	1	—	1	25
	比率	4	60	28	—	4	—	4	100
縄文	実数	18	18	27	38	90	100	13	304
	比率	6	6	9	13	30	33	4	101
弥生	実数	31	34	36	11	8	12	—	132
	比率	23	26	27	8	6	9	—	99
全体	実数	50	67	70	49	99	112	14	461
	比率	11	15	15	11	21	24	3	100

弥生時代では、岩宿・縄文時代のような高いピークを形成する地域がめだたない。一番多い所が、30キロ圏で27%（36ヵ所）であり、最後の64キロ圏茶臼山付近には遺跡がない。長篠を基点にして見ると下流平野部の遺跡が76%を占め、山地部の占有比は23%と低い。弥生時代の分布傾向は、岩宿時代と縄文時代の間mediateのような印象を受ける。長篠から下流の段丘面上に多くが位置する点は、岩宿時代の分布傾向と一致する。しかしもうすこし詳しく見ると、豊川沿いの沖積面にも多くの遺跡が分布すること、茶臼山周辺の高原地域に遺跡がないこと、山地部の分布比がかなり低いことなどからみれば、岩宿・縄文の間mediateというよりはやはり弥生特有の分布類型を示すと見るべきであろう（第2図）。

## 2. 遺跡の分布と生業

上記のような時代ごとの遺跡分布・立地環境の差は、当時の生活様式とくに生業形態に多くが起因していると見ることができる。時代別の遺跡分布の在り方の全国傾向については別に記した所である<sup>3)</sup>、本報告集でも簡単に紹介したように<sup>4)</sup>、これはひとり豊川流域固有の現象ではなく、時代の変化に即応した生活空間の在り方、時代ごとの土地利用の特性を現した汎日本的な特徴である。

岩宿時代は狩猟・採集の時代であり、海岸に出る必要はとくになく、海から一定



第2図 距離別遺跡分布頻度および分布類型概念図(破線)  
 (I:岩宿時代 J:縄文時代 Y:弥生時代)

距離を隔てた内陸の平坦地がひろがる地理空間をおもな生活の舞台としていた。長篠から下流の広い平坦な段丘面上に遺跡が集中する点は、このことをよく反映している。特に留意すべきは寒狭川流域の山地帯に遺跡がないことである。狩猟・採集といえど奥深い山地向きの生業と考えられがちだが、いまだ人口密度が低く、野山の動植物資源が豊かな時代には、なにも奥山に分け入りここを生活の舞台にする必要はなかった。そしてなによりも重要なのは、山地には山地の生活があるのであり、新しい生活環境に分け入って新しい生活様式のもとで暮らしをたてるには、それを可能にする道具・技術の開発が先立ってなされねばならなかったことである。縄文時代を象徴する鏃(弓矢)・磨製石斧・土器などは新天地の開拓にあたってこうした役割を果たしたにちがいない。農村・山村・漁村生活という言い方をするが、山村生活・山の暮らしの出現は、縄文時代の訪れを待たなければならなかったのであり、岩宿時代は言わば「原・野」の暮らしの時代だったといえることができる。

縄文時代になって漁撈が始まり、海との深い繋がりをもつ日本の基層文化が形成される。

表中のデータだけからは山地から海岸に近づくにしたがって分布数を減らしていく傾向を示すが、豊川河口からさらに30km以上も海に突き出す渥美半島には多数の著名な貝塚が知られているように、海岸部が重要な生活の舞台であったことは間違いない。それにしても端山地帯や平野部に遺跡が少なく、深山地帯に集中する傾向は見過ごすことができない。たんなるデータの偏りとかこの地域の特殊な現象ではなく、時代の趨勢を示しているとみなければならないであろう。縄文時代の土地利用は山地を中心に海岸まで、広くほとんどあらゆる地理空間を利用しつつ、したがって土地土地のあらゆる天然資源を万遍なくきめ細かく利用し、文化を発展させていった点にこの時代の特色がある。なお前後の時代との対比を意識して言えば、土地利用の類型を念頭に置きながら、この時代は「山と海」の暮らしというこ

とができよう。

弥生時代に至って狩猟・採集・漁撈に加えて、新しく農業の時代となる。当然河口部の沖積地や湧き水などの利用できる扇状地・段丘周辺の土地に集中する顕著な傾向を示している。長篠より下流の平野部の段丘地形上および沖積面に顕著な分布集中を示すことや、山地帯で遺跡分布が急減するのは、この間の事情をよく反映している。40～60キロ圏の山地帯に属する遺跡もしたがって川沿いに集まっている。50～60キロ圏に跨がって小さな集中を見せるのは、図示していないが天竜川水系の振草川流域の分布群である。

10キロ圏ごとの分布域の集中が岩宿・縄文時代ほど際立ったピークを形成しないのは、利用する土地類型（地理空間）が一層広がったかにも見受けられるが、実態は下流・河口域の水辺に集中する傾向を見せ、農耕という新たな食糧生産方式の導入によって、これとの立地上の対応を顕在化させたというべきであろう。縄文時代よりもむしろ、土地利用の形態は沖積地への積極的な進出、集中と見るべきであろう。

弥生時代のこうした土地利用に基づいた暮らしを岩宿・縄文時代と対比的に述べるとすれば、水辺の「平野の暮らし」とでもいうべきであろう。

このように遺跡の分布・立地を時代ごとに土地条件との照合を意識しながら見ていくと、豊川流域においても歴史の変動の様が、そこによく反映されていることが頷かれる。

大野原湿原のある作手村は段丘地帯の西隣にありながら、標高約500mの高地にある。地元で作手高原と言うように、ここは高原状の土地である。ここでは縄文・弥生の遺跡がともに発見されており、早くから農耕が営まれていたことが知られる<sup>5)</sup>。また本報告集でも記したように、岩宿時代の高原が、主体ではないが重要な生活空間であったことから、茶臼山高原同様に岩宿時代の遺跡が発見されるのではないかという期待を抱いている。いまだこの期待は現実のものとなっていないが、地理的には豊川河岸の土地と近接していながら一段高い高原状の土地条件のもと、かつて湿原がひろがり、今も地場産業としてピートの採掘が続けられる大野原湿原一帯の固有の暮らし振りがどのようなものであり、それは何時の時代から形成されたものであるのか、岩宿・縄文・弥生時代の作手村の遺跡分布の特徴がどのあたりにあるのかはいまだ未解決であるが、上記のような意味において筆者にとって強い関心事なのである。

### 3. シカ・イノシシを巡って

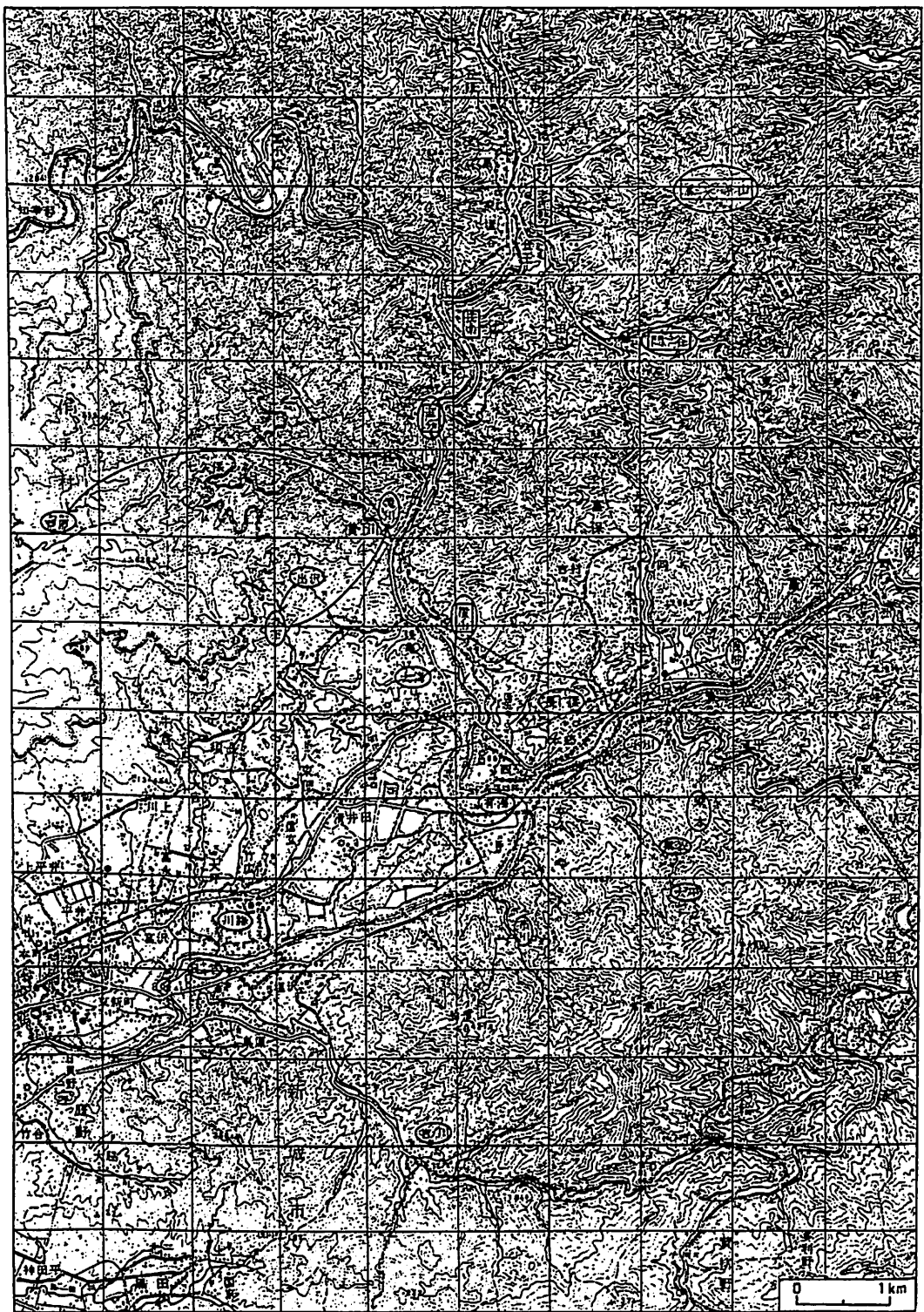
遺跡分布とその意味づけについて若干言及したところで、唐突のようだけれどもシカ・イノシシとの関係について触れてみたい。シカ・イノシシといえば、三河の生んだ民俗学の大先達・早川孝太郎の著書に『猪・鹿・狸』という名著<sup>6)</sup>があるの

で、まずこれを話の糸口としよう。氏は画業を志して上京し、柳田国男の弟・松岡映丘に師事したことが機縁となって後に民俗学に転じた人であったので、同書中のほのほのとした挿絵ともどもご記憶の方も多いのではないかと思う。書名のとおりここでは、シカ・イノシにまつわる興味深い話の数々が語られている。遠くは段丘山から伊良湖岬までのちょうど遺跡分布を問題にしたとほぼ同じ範囲から話題を採集しているが、早川が長篠から寒狭川を少しばかり遡った横川の生まれであったので、主として長篠付近を中心とし北は鳳来寺南は新城辺りまでの聞き書きが多い。遺跡分布の記載に倣うならば、長篠を基点として上流の山地側と下流側の平野部の両方の地理空間を含む地域から採集された話ということになる。

ところでここに登場するシカ・イノシシに関連する村の名を地図上に落としていくと、ここでも興味深い事実気づく(第3図)。イノシシにまつわるものは長篠から上流の山地側に多く、シカのそれは下流の平野部の段丘地形と水田の開ける地域寄りに多い。筆者にはこれがたんなる偶然ではなく、なにがしかの事情を反映しているのではないかと思える。これから先は思いつきの域をでない着想で、時代も人間の暮らしも動植物の生態についても、思い付くままに土地と人と動植物と時間軸とをないませにして考えを進めてみたい。これはまた大野原湿原研究会に臨む筆者の姿勢でもある。

筆者はかつて長篠から寒狭川を10kmほど遡った愛郷の地でイノシシについて調査したことがある<sup>7)</sup>。ここでの聞き取りによれば、愛郷一帯では久しくシカは獺の対象となっておらず、もっぱらイノシシばかりを狩っており、シカは一帯には棲息していないという<sup>8)</sup>。その一方でシカは「本宮鹿」の話(早川、P. 102・126。以下同様。)にもあるように、愛郷の南方本宮山周辺の作手村だけにはいまも棲息し、これが愛知県下唯一の棲息地となっている。

愛郷での聞き取りによれば、獺師はイノシシが暗がり好みと認識している。この点を重視すれば、起伏の多い山地に棲む愛郷のイノシシは木々の生い茂った森を好みという習性が理解される。これに対しシカはより明るい森や林、よりオープンな土地を好みのではないかと思わせる。この点はシカの話の採集地が長篠から下流の段丘地帯、開けたオープンな地形が展開する一帯に多いこと、「引鹿」の話(P. 89)のように山奥から採餌のために群をなして台地にでてくることなどからも頷かれるところである。それは山塊の山裾や台地上には近代にいたるまで草刈り場の入会地があちこちにひろがっていたという当時の土地景観に大きな要因があったであろう。このようにシカが夜採餌に繰り出し、明け方引き返すことを繰り返していたその行動の舞台は、「有海の篠原は、……川路の原とともに、またとない鹿の狩場であった」と記されているように(P. 87)、今も土地の人々から萩平、有海原のように呼び習わされているその土地である。このような「平」、「原」、は豊川流域の長篠から河口域までに広がる段丘地帯がまさにそれに当たる。



第3図 「猪・鹿・狸」に現れたシカ・イノシシ関連地名分布図  
 (四角枠イノシシ 丸枠シカ 矢印は逃走経路。地図は国土地理院  
 5万「三河大野」利用。)



豊川西岸、本宮山塊の山裾には、扇状地や段丘からなる広い台地がつづく。ここには遺跡名にもある萩平（第1図2・3）、有海原、長篠の合戦の主戦場として名高い設楽原、川田原、炭焼平、才原台地、西原、日吉原など、新城市域から下流の台地ではそれぞれが△△平、○○原と呼ばれならわされており、地質学では地形面区分の名称にも用いられている。東岸には宇利ノ原、高師小僧で知られる高師原などをすぐに思い浮かべることができる。

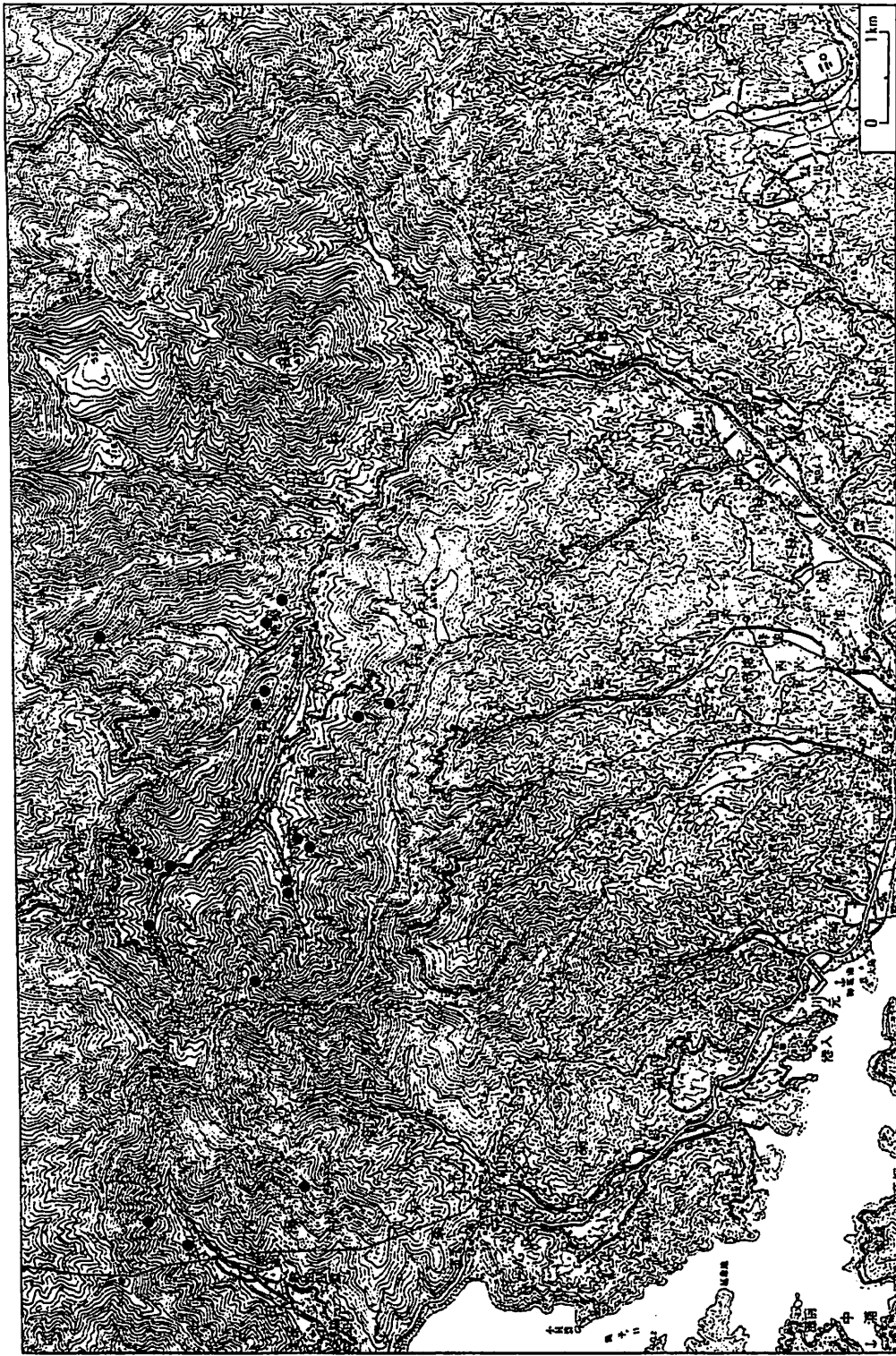
シカが明るく開けた伐採地や草地を好むことは、岩手県五葉山のシカの生態観察<sup>9)</sup>でも縷々語られる一般的な習性であって、先に示したシカ・イノシシの話の採集位置はまさにこうした動物の生態が反映したものにほかならない。

一方、あらためて記すまでもなく、エゾシカなどを含めシカは北海道から南西諸島にまで広く分布している。高山や深雪地帯をのぞけば地形や植生にかかわらずひろい棲息域を有している。イノシシも北海道や東北地方をのぞいて広く棲息しており、関東地方以南の地では、大きくみてシカの棲息地と重複している。縄文時代では一層分布域が広がったことが貝塚などから出土する動物骨の研究から明らかになっているので、濃淡の差はあるにしても本州以南の地にシカ・イノシシが広く共生していたことになる。

シカはまた、地形的にも先の五葉山のほか奥日光や南アルプス、八ヶ岳など高原や奥山・深山地帯にまで棲息している。季節によって雪や蚊・虻を避け高所、低地と移動する場合もある。シカの棲息を決める第一義的な要因は地理・地形環境というよりも食性の問題であり、東北日本では林床のササ、西南日本では木の葉へ傾斜するなど、棲息環境にも食性にも多様性を示し、柔軟な適応力を有している。このようにどこにでも生きられるたくましい生活力を持っている。

こうした点を重視すれば、シカ・イノシシを先の文脈のように異なった地理空間・地形領域にことさら区別して関連づけることに問題があることもたしかである。しかしシカ・イノシシが広く共生するという現象は列島規模で巨視的に見た場合であって、微視的に見た場合やシカ・イノシシの行動・生態などと関連づけて見た場合には、早川の著書から引いたシカ・イノシシ関連地名の偏在傾向には重要な意味があったと考えることができるのではないかと思う。

早川の著書にある段戸山の「鹿の大群」の話（P. 124）や鳳来寺「行者越の狩人」の話（P. 105）のように、いま話題にしている土地周辺をみても現在のシカの分布が本来のものではなく、局所的に押し込められたものであって、本来はもっと広がったことは明らかであり、第3図に示したような地理的環境との対応関係がシカ・イノシシの棲息地、棲息条件一般を示すものではないことはもとよりであるが、両者は広く共存しつつも、明るくオープンな野・原と暗く深い森のような環境がモザイク状に混在している場合、局所的にはそれぞれ好ましい土地が異なり、一種の棲み分けをしつつうらしていたと言う一面が地名分布のプレというかたちであらわ



第4図 南宇和島僧都谷におけるシカ・イノシシの捕獲位置  
 (1940~45年狩猟期. ▲鹿 ●イノシシ・子猪各1頭 註10) 千葉論文による. 地図は国土地理院5万「岩松」「宿毛」利用.)



第5図 僧都谷遠景，後方観音岳（東方より）

地点はイノシシのそれよりも明らかに谷の中央で沢・田畑寄り，つまり谷手前入口側に偏っている。

これは同じ山域に棲息するシカ・イノシシでありながら，長篠周辺の例と同様猟師に追われた末の捕獲地点ということであるにしても，シカはより田畑寄りの開けた明るい土地にでることをよく示しているとみることができる。

#### 4. 縄文のイノシシ，弥生のシカ

微視的にシカ・イノシシの習性・生態をこのように見てくると，この二種の動物と時代との関わりにも通じる窓が開けてくるように思われる。シカ・イノシシは縄文時代の狩猟獣の代表格とされ，深山地帯のクマ・カモシカ猟の場合をのぞけば，貝塚などからの出土数は両者で狩猟獣の大部分を占め，その比率はほぼ等量とされている<sup>11)</sup>。しかしながら，シカ・イノシシの習性・生態との関連を微地形，微環境的に見ていくと，本来土地ごとにシカ・イノシシのいずれかに傾斜していたことも大いにありえたのではないかと考えられてくる。

考古学では，「縄文のイノシシ」「弥生のシカ」とそれぞれに時代の象徴的動物として理解しているように，縄文時代の動物型土製品はイノシシであり，弥生時代の動物の図像表現は反対にシカが主であって，イノシシは少ない。こうした事実の背後には，弥生時代になって建築資材や農具として木材資源の利用が一挙に拡大し，木々が伐採されて縄文の深い森は明るくなり，集落の周辺をオープンな森の環境が取り巻くようになったという土地利用の時代的性格が反映していたという事情があったのではないかと考えられる。

縄文から弥生への集落周辺の林相の変化はマツ・ナラ類の急増が象徴するようには，建築材・燃料・農具・灌漑施設用にと多様な木材需要が高まって，集落付近の木材伐採が進み，照葉樹林が二次林化することが特徴とされている。シカは先にも

れているというのが，正しい生態に対する認識ではないかと思われる。

シカ・イノシシの出現地の偏りについては，長篠周辺とおなじように解釈される例が，千葉徳爾氏の研究のなかにも見いだすことができる<sup>10)</sup>。それは愛媛県南宇和郡城辺町僧都の谷におけるシカ・イノシシの捕獲地点を調査したものである（第4・5図）。ここではシカの捕獲

記したように、林縁にも森の奥にも平坦地にも起伏の多い山地にも広く棲息しているけれども、縄文の深い森、弥生の村の周辺にひろがる明るい林というように対置的に見ると、シカこそ弥生人世界に似つかわしく、イノシシは一層縄文的な性格を帯びているのではないかと思う。このように「縄文のイノシシ」「弥生のシカ」は、各時代ごとの生業形態の差や動物と人間との係わり方、そしてこれにもとづく人の生活空間と動物の棲息環境との重なり方にも大きな原因があったに違いない。

害獣役獣という観点から見ても、両者は甲乙つけがたい。害獣としての典型はイノシシの田畑荒らしだが、早川の著書中の挿話を引くまでもなく、稻田を食い荒らされた被害は惨憺たるありさまで、一夜にして一枚の田んぼが全滅などという例はざらにあるから、その凄まじさが想像されると同時に、甲乙つけがたいとはいえ、弥生人にとってはイノシシが一枚上手の横綱であったであろう。こうしてみると弥生人のシンボリックなシカはイノシシのマイナスイメージの反作用という性格を一面で含んでいるのかもしれない。

## 5. 動植物と時代

岩宿・縄文・弥生と各時代それぞれに土地利用のかたち特徴を見せ、それは当時の生業や生活様式全般のあり方と深い繋がりを有していた問題であったことをシカ・イノシシを通じて考えてみた。この辺りでもう一度、豊川流域固有の課題に立ち返って動植物環境との関係を概観的に補足しておきたい。植物的環境については、列島規模の植生図や大野原湿原での花粉分析結果を念頭に置くと、岩宿時代では、豊川流域の主たる遺跡分布域である長篠から下流の低地の段丘地帯は冷温帯落葉広葉樹林帯に位置したが、もう一つ的生活空間である茶白山周辺の高原地帯は亜寒帯針葉樹林から高原特有の草原状景観が開けたオープンな土地であったと考えられる。

動物は温帯系の動物群（ナウマンゾウ・オオツノジカ・ニホンジカ・ノウサギなど）と北方系のマンモス動物群（ヤギウウ・ウマ・ヘラジカ・トナカイなど）とが当時本州東半部で広く棲息域を交差させていたことを考えると、低地の段丘地帯では温帯系の動物群の世界であったであろう。またマンモス動物群のうちヘラジカの南限は岐阜県熊石洞にあるので、茶白山高原周辺では温帯系の動物群にくわえて北方要素も色濃かったであろう。このうちの一つとしてヘラジカなどが姿をみせていたと考えても差し支えないであろう。高原の茶白山周辺がオープンで草原的景観を示していた可能性は、そこには群棲型の動物がより多く、狩りの方法も対象もこれを意識し、これに支えられた暮らしが展開されたことを予測させる。これに対し岩宿時代遺跡の集中する低地の段丘地帯ではどうであったろうか。遺跡の属する時代が岩宿時代後期に該当すると考えられることから最後の氷期の最寒冷期を念頭に置いて考えれば、この頃すでにナウマンゾウはほぼ絶滅し、オオツノジカもその数を

減らしつつあった可能性が高いので、ニホンジカが一層重要な位置を占めるようになっていたものと想像される。

縄文時代では長篠から下流では照葉樹林帯が、これより上流や山地では落葉広葉樹の森が茂っていた。上流域の山地にはクマ・カモシカも多く棲息し、これより下流の地域ではシカ・イノシシ・タヌキ・ノウサギなどが主体の棲息域をなしていたであろう。そこでは土地土地の微環境の相違に応じてシカ・イノシシのいずれか一方の棲息により適した土地条件が現れていたに相違ない。そしてまた海岸部での漁撈活動にも大きな特徴があった。

弥生時代にはいると水田や畑が開かれる。農具や水田施設のために木材需要が増し、村の周辺は常に人の手が入るようになっていたことであろう。マツ・ナラ類の顕著な出現がこの時代の植生の特徴であり、大野原湿原の花粉分析<sup>12)</sup>が示すように豊川流域のこの土地もその例外ではなかった。明るい森や林が広がると弥生集落の周辺ではシカが一層親しい動物になる。そして銅鐸などにシカがしばしば描かれる時代となる。もちろんイノシシもいまだ健在であったし、山間地の弥生人は縄文時代同様シカ・イノシシと平等にお付き合いしていたであろう。しかし、下流の水田地帯ではきっとシカとの間柄が一層濃さをましていったに違いない。

作手の本宮山域のシカがいまは局所的に押し込められるようになった今日までには、岩宿時代以来のこうした長い道のりがあったのである。

## 6. 狩猟の地理空間

深い森／起伏の多い山地／イノシシ／縄文文化、明るい林／平坦な台地・平野／シカ／弥生文化と連想的に書き連ねていくと、筆者にはここには「イノシシ型」「シカ型」とでも言うような対照的な人／地理空間関係が、現象的にはほんやりとであるがイメージでは鮮明に浮かび上がって来るように意識される。縄文時代の狩猟獣をシカ・イノシシが代表するのは、一つには広域データの集計の妙であり、一つにはシカ型空間とイノシシ型空間の双方の利用の一体化した姿であり、弥生のシカはシカ型空間への一層の傾斜を意味しているのではないだろうか。ついでに岩宿時代についていえば、明らかにシカ型の類型に相似た要素を見せながら、また別個の狩猟世界が展開していた。この三者を岩宿的、縄文的、弥生的狩猟空間と表現することもあるいは可能であるかもしれない。

以上思いつくままに記してきたように、全時代を通して見れば、野・原・山への人の進出の仕方は時代によって様々だが、遺跡分布を手がかりに豊川流域を見てみると、人と時間と土地と動植物とがないまぜになって、この地を見る目が無限に広がって来るように思われる。作手高原・大野原湿原の様々な研究データをもとに、ここから追究しうる課題も果てし無く広い領域に開かれて行くように思われる。

筆者はとりあえず、これまでに記したような時代とその生活様式の類型との関係

で大野原湿原と作手高原とをめぐって一体どんな土地利用が展開されていたのか、豊川流域全体の歴史と文化の背景を考えながら確かめたいし、人間を含めた自然史をこの地なりに語ろうとするとどのようなことになるのかという点について、今後具体的データを基に、そして想念の赴くままに考えていきたいと考えている。

〔付記〕本稿を草するにあたり、愛知県埋蔵文化財センター・小沢和弘、名古屋市見晴台考古学資料館・水野裕之両氏のご教示をえました。末筆ながら記して謝意を表する次第です。

## 註

- 1) 遺跡分布の集計は、愛知県教育委員会編『愛知県遺跡分布図』（愛知県教育委員会、1972年）によった。ただし、岩宿時代についてはおもに筆者の知見によった。
- 2) 最新版の愛知県教育委員会編『愛知県遺跡分布図3 東三河地区』（愛知県教育委員会、1990年）によれば、茶白山遺跡は7地点の遺跡群からなるとされている。
- 3) 鈴木忠司『先土器時代の知識』（東京美術、1984年）。
- 4) 鈴木忠司「高原・湿原・岩宿文化」（『大野原湿原研究会報告集Ⅲ』、愛知県作手村教育委員会、1993年）。
- 5) 七原恵史「作手村の遺跡分布」（『大野原湿原研究会報告集Ⅰ』、愛知県作手村教育委員会、1989年）。
- 6) 早川孝太郎『猪・鹿・狸』（講談社文庫、1979年、初版1926年）。
- 7) 鈴木忠司「三州愛郷猪狩記」（『朱雀』第5集、京都文化博物館、1992年）。
- 8) 早川が聞き取りをした当時すでに「猪とちがって鹿の方は界限ではもうどこの山にもいなくなった」（P. 86）と記されている。
- 9) 高槻成紀『北に生きるシカたち』（どうぶつ社、1992年）。
- 10) 千葉徳爾「豊後水道沿岸における急傾斜階段耕地の成立」（『地理学評論』33-9、日本地理学会、1960年）。
- 11) 西本豊弘「縄文時代のシカ・イノシシ狩猟」（『古代』91号、1991年）。
- 12) 石田 仁・中堀謙二「愛知県作手村大野原湿原の花粉分析」（『大野原湿原研究会報告集Ⅰ』、愛知県作手村教育委員会、1989年）。

# 大野原湿原に関する研究報告

## 1. 著書および論文発表 (発表年順)

- 権田昭一郎 (1958) 「作手村植物誌」. 148p
- 権田昭一郎 (1962) 作手湿原を中間湿原とみる. 植物趣味: 4
- 権田昭一郎 (1968) 水田化した作手湿原. 植物採取ニュース, 54: 1
- 権田昭一郎 (1971) 愛知県の湿原植物. 「愛知の植物」: 13
- 権田昭一郎 (1973) 湿原植物の移植と人工湿原づくり. 植物採取ニュース, 67: 2
- 権田昭一郎 (1977) 埋め立て計画で絶滅寸前のヤチスギラン. 植物採取ニュース, 92: 1
- 鳥居 孝ほか (1983) 長ノ山湿原. 「愛知の自然を訪ねて (新城・南設楽地域) 自然観察ガイドNo 5」: 46-52
- 権田昭一郎 (1984) 「作手の植物」. 200p
- 権田昭一郎 (1984) 長ノ山湿原の現存植物図. 「愛知の植生」: 2
- 沢井 誠 (1984) 愛知県作手村に分布する第四系について. 愛知県理科教育研究会高等学校部会研究集録, 21: 43-46.
- 芦野 泉 (1986) 作手白鳥神社と初期農耕. 東アジアの古代文化, 47: 1-11
- 石田 仁・中堀謙二 (1987) 愛知県作手村大野原湿原の花粉分析. 日本林学会中部支部論文集, 35: 135-138
- 筒木 潔・武内良恵・渡辺 彰・鍛塚昭三 (1988) 埋没泥炭土壌における年代経過に伴う腐植の性質の変化—愛知県南設楽郡作手村大野原湿原堆積物の有機物組成. 名古屋大学総合研究資料館報告, 4: 65-80
- 新井重光・渡辺 彰・高木賢二・筒木 潔 (1989) 大野原泥炭層の土壌化学的解析—特に黒ボク土に関連した性質について. ペドロジスト, 32: 16-25
- 新井重光・中井 信・大塚紘雄 (1990) 大野原泥炭の腐植および無機成分に認められた黒ボク土的性質. ペドロジスト, 34: 31-36
- 中堀謙二 (1992) 愛知県作手村大野原湿原の花粉分析による過去1万2千年間の植生変遷. 日本林学会中部支部論文集, 40: 77-80
- Tsutsuki, K. and Kuwatsuka, S. (1992) Characteristics of humin metal complexes in a buried volcanic ash soil profile and a peat soil. *Soil Sci. Plant Nutr.*, 38: 297-306
- 新井重光・伊藤 治・林 繁信・早水紀久子 (1993) 固体高分解能<sup>13</sup>C-NMR法による泥炭地有機成分の変性過程および古黒ボク土の混入の観察. ペドロジスト, 37: 2-14

- Tsutsuki, K., Kondo, R., Shiraishi, H., Kuwatsuka, S., and Ohnohara Wetland Research Group (1993) Composition of lignin-degradation products, lipids, and opal phytoliths in a peat profile accumulated since 32,000 years B.P. in central Japan. *Soil Sci. Plant Nutr.*, **39**: 463-474
- 中村俊夫・池田晃子・太田友子 (1993) 愛知県南設楽郡作手村の大野原湿原及び長ノ山湿原の<sup>14</sup>C年代測定. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書 (IV) : 61-76
- 中堀謙二 (1994) 愛知県作手村大野原湿原の花分析による後期更新世の植物変遷. 日本林学会中部支部論文集, **42**: 95
- Tsutsuki, K., Esaki, I., and Kuwatsuka, S. (1994) CuO-oxidation products of peat as a key to the analysis of the paleo-environmental changes in a wetland. *Soil Sci. Plant Nutr.*, **40**: 107-116
- 権田昭一郎 (1994) 泥炭を持つ湿地とその植物. 環境, **69**: 6-8
- 青山(沢井) 誠 (1994) 湿地の地下は?. 環境, **69**: 11-12
- 沢井 誠 (1995) 愛知県作手村大野原湿原の広域火山灰. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書 (VI) : 63-69

## 2. 口頭発表 (発表年順)

- 川嶋(吉村)暁夫・作手団体研究グループ (1982) 愛知県作手村高里付近の第四系について. 日本地質学会第89年学術大会講演要旨: 128
- 沢井 誠・作手団体研究グループ (1986) 愛知県作手村に分布する第四系 (その2). 日本地質学会第93年学術大会講演要旨: 121
- 藤井登美夫・作手団体研究グループ・新井房夫 (1986) 三河高原南部大野原湿原堆積物の堆積年代. 日本第四紀学会講演要旨集, **16**: 38-39
- 渡辺栄次 (1991) 大野原湿原泥炭中の無機物組成. 日本第四紀学会講演要旨集, **21**: 132-133
- 中堀謙二 (1991) 三河高原・大野原湿原堆積物による最終氷期以降の古環境変遷 - 花粉分析から推定される過去3万年間の植生変遷と気候変動. 第17回名古屋大学水圏科学研究所シンポジウム「大気水圏環境の自然変動」講演要旨集: 4
- 村上哲生 (1991) 三河高原・大野原湿原堆積物による最終氷期以降の古環境変遷 - 珪酸質被殻を持つ微小生物遺骸による大野原湿原古環境の研究. 第17回名古屋大学水圏科学研究所シンポジウム「大気水圏環境の自然変動」講演要旨集: 5
- 渡辺 彰 (1991) 三河高原・大野原湿原堆積物による最終氷期以降の古環境変遷 - 埋没泥炭土中の有機物組成の変化と古環境の変動. 第17回名古屋大学水圏



- 科学研究所シンポジウム「大気水圏環境の自然変動」講演要旨集：6  
 渡辺栄次 (1992) AT, K-Ah 火山灰の粘土鉱物. 日本土壤肥料学会中部支部会第  
 67回例会講演要旨集：2  
 筒木 潔・近藤錬三・町田理枝・吉藤真紀子 (1993) 泥炭地構成植物および泥炭  
 土壌のフェノール性化合物・脂肪酸組成. 日本土壤肥料学会講演要旨集第39  
 集：10  
 渡辺栄次 (1993) 泥炭調査法について—大野原湿原の研究の現状—. 国立環境研  
 究所環境生態セミナー講演要旨集：1

### 3. 即刊の「大野原湿原研究会報告集 I～III」の目次

#### 「大野原湿原研究会報告集 I」(1989年発行)

あ い さ つ	作手村教育委員会	i
は じ め に	歙塚昭三	ii
1. 大野原湿原堆積物の堆積年代		
……作手団体研究グループ・大野原湿原研究グループ・新井房夫		1
2. 愛知県作手村大野原湿原の花粉分析		
—過去二万数千年間の花粉群集変遷—	石田 仁・中堀謙二	14
3. 大野原湿原跡の堆積物中の珪藻遺骸	村上哲生	20
4. 大野原湿原断面の化学成分分布の特徴	渡辺栄次・堀尾正和	30
5. 泥炭層のリン酸分布	安島 馨・新井重光・歙塚昭三	40
6. 埋没泥炭土壌における年代経過に伴う腐植の性質の変化		
—愛知県南設楽群作手村大野原湿原堆積物の有機物組成—		
……筒木 潔・武内良恵・渡辺 彰・歙塚昭三		42
7. 大野原泥炭腐植酸の光学的性質と分画	新井重光	53
8. 大野原泥炭による土壌改良資材がダイズの生育と根瘤着生に及ぼす影響		
……新井重光		55
9. 大野原湿原堆積物の土壌化学的解析		
—特に黒ボク土に関連した性質について—		
……新井重光・渡辺 彰・高木賢二・筒木 潔		56
10. 鞍掛山の黒ボク土		
……沢井 誠・新井重光・渡辺栄次・大羽 裕・筒木 潔		61
11. 愛知県作手村高里地域(古大野原湿原)の重力異常		
……沢井 誠・志知龍一		81
関係者名簿		88

編集後記	89
大野原湿原研究会研究発表題目等	13, 29, 39, 52
共同試料採取参加者名	19

### 「大野原湿原研究会報告集Ⅱ」(1991年発行)

はじめに	作手村教育長 原田雅史	i
1. 大野原湿原堆積物の野外調査結果 (1987年~1990年)	藤井登美夫・大野原湿原研究グループ	1
2. 土地改良前の大野原湿原の空中写真	藤井登美夫	8
3. 作手村における湿原の概要とその変遷	権田昭一郎	9
4. 細田'87トレンチ検出の大型植物化石について	鈴木忠司・土江申明・椎名恭子・後藤和風	20
5. 白須地点検出の大型植物化石について	鈴木忠司・黒坪一樹・土江申明・湯村 功	22
6. 埋没泥炭土の <sup>14</sup> C年代と有機物組成	筒木 潔・白石祐彰・鉄塚昭三	24
7. 大野原湿原堆積物中に新たに見いだされた広域テフラ	沢井 誠	34
8. 泥炭中の始良 Tn 火山灰 (AT) は降下一次堆積物か? — シソ輝石・火山ガラスの長径測定を例として —	沢井 誠	42
9. 白須断面の化学成分からみた特徴	渡辺栄次・堀尾正和	49
10. 大野原湿原堆積物分布地域 (高里面) の水準測量結果	佐宗勝美・ 太田昌孝・垣内寿一・矢頭一起・吉村暁夫・藤井登美夫・沢井 誠	59
11. 愛知県作手村高里地域 (古大野原湿原) の重力異常	沢井 誠・志知龍一	81
12. 湿原堆積物の有殻アメーバの遺骸	村上哲生	74
13. 鞍掛山の黒ボク土中の鉱物	沢井 誠・新井房夫・新井重光・渡辺栄次・大羽 裕・筒木 潔	77
14. 愛知県作手村高里地域の第四系	作手団体研究グループ	80
15. 総合討論—白須断面について—	文責 渡辺栄次・筒木 潔	98
関係者名簿		107
編集後記		108
大野原湿原研究会研究発表題目等		5, 58
共同試料採取参加者名		21

「大野原湿原研究会報告集Ⅲ」(1993年発行)

はじめに	作手村教育長 原田雅史	i
1. 大野原湿原及び長ノ山湿原の機械ボーリング結果	大野原湿原研究グループ	1
2. 大野原湿原堆積物9101B3、B4コアの加速器 <sup>14</sup> C年代	中村俊夫・池田晃子・太田友子	14
3. 長ノ山湿原と古大野原湿原堆積物中の火山灰対比	沢井 誠	22
4. 古大野原湿原堆積物中の天城-カワゴ平火山灰 (Kg) の屈折率	沢井 誠・古澤 明	30
5. 始良 Tn 火山灰 (AT) の新露頭の発見	吉村暁夫・大野原湿原研究グループ	33
6. 現生湿原堆積物中の無機成分—長ノ山湿原の場合—	渡辺栄次	38
7. 古宮城址前断面の有機物についてI—炭素および窒素含量—	渡辺 彰	48
8. フェノール性化合物組成から見た大野原湿原の変遷(古宮城址前水田86-1断面の分析から)	筒木 潔・江崎幾朗・鉄塚昭三	52
9. 植生の特徴から見た作手湿原	権田昭一郎	62
10. 高原・湿原・岩宿文化	鈴木忠司	70
11. 愛知県作手村高里地域(古大野原湿原)の重力異常について補遺	沢井 誠・志知龍一	81
関係者名簿		88
編集後記		89
大野原湿原研究会研究発表題目等		90

## 研究会会員名簿

氏 名	所 属 (参加当時のままの所属もある)	専 門 分 野
権田 昭一郎	愛知県環境審議会	植物学
池田 芳雄	愛知県環境審議会	地質学
加藤 賢次	愛知県農業総合試験場	土壌学
沢井 誠◎	愛知県立犬山高校、作手団研G	地質学
藤井 登美夫◎	愛知県立瑞陵高校、作手団研G	地理学
七原 恵史	愛知県立瀬戸高校	考古学
山本 康孝	安城市立桜井中学校、作手団研G	地質学
池田 潤	日本理水設計(株)	地形学
吉村 暁夫	大府市立大府中学校、作手団研G	地質学
内田 義和	岡崎市立新香山中学校、作手団研G	地質学
近藤 鍊三	帯広畜産大学	土壌学
筒木 潔	帯広畜産大学	土壌学
土江 伸明	関西大学文学部OB	考古学
黒坪 一樹	京都府立埋蔵文化財センター	考古学
鈴木 忠司	京都文化博物館	考古学
新井 房夫	群馬大学教育学部名誉教授	地質学
椎名 恭子	主 -	考古学
中堀 謙二	信州大学農学部	植物学
安倍 亜紀子	信州大学農学部OB	植物学
安島 居孝	鳳来町立東陽小学校、作手団研G	地質学
渡辺 栄次◎	国立名古屋工業技術研究所	材料化学
齋藤 彦徳	作手村教育委員会	-
矢頭 一起	作手村教育委員会	-
大羽 裕	筑波大学応用生物化学系名誉教授	土壌学
小松原 琢	東北大学理学部	地理学
石田 仁	富山県林業試験場	植物学
諏訪 齋	名古屋市立宮前小学校	地質学
村上 哲生◎	名古屋市環境科学研究所	藻類学
坂本 充	滋賀県立大	生態学
滝本 まさ子	名古屋大学大気水圏科学研究所	生態学
志知 龍一	名古屋大学地震火山観測地域センター	地球物理
鎌塚 昭三	名古屋大学農学部名誉教授	土壌学
中村 俊夫	名古屋大学年代測定資料研究センター	地球化学
池田 晃子	名古屋大学年代測定資料研究センター	地球化学
太田 友子	名古屋大学年代測定資料研究センター	地球化学
渡辺 彰◎	名古屋大学農学部	土壌学
江崎 幾朗	愛知県農業総合試験場	土壌学
白石 祐彰	奥村組(株)	土壌学
大矢 朋子	北海道開発庁	土壌学
西田 史郎	奈良教育大学	地質学
渡部 道明	日本ビート開発(株)	土壌改良剤
芝原 慶次	日本ビート開発(株)	土壌改良剤
新井 重光	フィリピン土壌研究開発センター	土壌学
中井 信	農水省熱帯農業研究センター	土壌学
後藤 和風	花園大学OB	考古学
内園 立男	富士開発(株)	応用地質
阿部 暢夫	富士開発(株)	-
古澤 明	古澤地質調査事務所	地質学
湯村 功	立命館大学	考古学

(◎は編集係)

作手団研G = 作手団体研究グループ

## 編集後記

この報告集は大野原湿原研究会（6回実施）において報告された研究成果のうち、過去3回の報告集には載せることができなかったものを集録したものである。この形式の報告集としては最終のものであることや読者の方の読みやすさを考えて、私たちの研究全体をまとめた読みやすいものを書く必要があったが、今回は実現できなかった。今後、機会があれば実現したい。なお、最終の報告集であるので、学会など外部に発表した大野原湿原に関する研究報告（係が知り得た、著書および論文発表と要旨が印刷されている口頭発表）と「大野原湿原研究会報告集Ⅰ～Ⅲ」の目次を掲載した。

手弁当で集まった大野原湿原研究会であるが、作手村教育委員会にはご支援・ご協力を賜った。この報告集も作手村教育委員会から発行していただいた。また、日本ビート開発（株）やボーリング地点の土地所有者をはじめ作手村の多くの方々からもご理解・ご協力をしていただいた。深く感謝する次第です。

（大野原湿原研究会編集係）

### 大野原湿原研究会報告集 Ⅳ

平成7（1995）年3月31日発行

編集者 大野原湿原研究会  
連絡先 渡辺栄次  
〒462 名古屋市北区平手町1-1 国立名古屋工業技術研究所  
電話番号 052(911)2111 FAX番号 052(916)2802

発行者 作手村教育委員会  
〒444-14 愛知県南設楽郡作手村大字高里字繩手上35  
電話番号 05363(7)2211 FAX番号 05363(8)1432

印刷所 (株)中部日本教育文化会  
電話番号 052(782)2323 FAX番号 052(782)8172